

松平氏館跡

松平東照宮は、松平家の祖先の住居であった松平の館の跡地に建つ。松平家の祖である親氏（伝 1394 年没）の時代から松平宗家はここに居を構えていたと考えられている。15 世紀に入ったら、松平家は西へ南へと進み、周辺の平野部を制覇した。やがて太郎左衛門という松平の分家がこの土地を守るようになった。太郎左衛門家の子孫が 1920 年代に東京に移るまで同家の屋敷地であった。この地に今のような東照宮ができたのは、1931 年のことである。

親氏の時代の館の様子は定かではないが、1600 年代以降の文献や地図には、北側の急峻な山肌を境に、三方を堀で囲まれた屋敷が描かれている。堀の東側は 1800 年代に埋め立てられたが、残された西と南に面する L 字型の部分と土橋、それに沿った石垣が今日に伝え残る。西側の石垣の一部は堀の中に突出しており、堀を進もうとする侵略者を横方向から直接射ることができるようになっている。

現在、松平家の館跡は、国指定史跡「松平氏遺跡」の中心となっている。その東側には 250 メートルほど離れたところに高月院があり、周辺には松平家が築いた中世の城跡が 2 つある。